

## 口腔機能の視点

田村 文誉

日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック  
日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科

人間が栄養を摂取する機能は2通りあり、ひとつは「哺乳機能」、もうひとつは「摂食機能」です。出生直後から行われる栄養摂取のための哺乳の動きは、原始反射のうちの哺乳反射（吸啜反射、探索反射、口唇反射、咬反射）によってなされます。これらの哺乳反射は胎生28週頃から出現し、脳の発達とともに減少し、生後5～7か月頃に消失します。

離乳食の開始は哺乳反射が消えた5～7か月頃を目安とするため、概ね5～6ヵ月が妥当です。目安としては、スプーンなどを口に入れても舌で押し出すことが少なくなる（哺乳反射の減弱）時期で、また食べ物に興味を示すようになります。発達の目安としては首すわりがしっかりして寝返りができ、お座りがだいぶしっかりしてきた、ということも大切です。なお、早産児の場合は修正月齢で5～6か月を目安とします。

摂食機能における嚥下の方法は、哺乳期と異なり、「成熟型嚥下」や「成人嚥下」を獲得します。離乳食の開始の頃（5～6か月頃）には、スプーンに乗った食物を、上下の口唇を閉鎖しながら口腔内に摂り込む「捕食機能」が獲得されます。口腔内で感知した食物の物性によって、そのまま嚥下するのか、舌で押しつぶしてから嚥下するのか、あるいは側方へ運んで咀嚼するのかを瞬時に判断しています。

嚥下や捕食機能が獲得された後の7、8か月頃には、舌前方部と口蓋で、捕食された食物を押しつぶす動きができるようになります。下顎乳前歯の萌出は、平均で9か月頃開始します。早産児では萌出遅延傾向が認められますが、修正月齢で換算すれば標準と同じという報告があります。

9～11か月頃になると、固形食を歯槽堤の側方ですりつぶす動きがみられるようになります。しかし、口腔内はまだ乳臼歯が萌出していません。すりつぶしの運動が認められたとしても繊維質のものや薄い葉物は処理できないため、食物の物性には注意を要します。

離乳食をどのように進めるかは、育児の中で非常に大きな位置を占めています。保護者は育児を楽しみながら、しかし常に悩みながら行っており、子どもの食に関しても同様でしょう。子どもの食が保護者にとっても楽しいものになるよう、生活全体を見据えた支援が求められます。